

Little Dorrit における中年の精神的な孤児, アーサー・クレナムの罪悪感

矢次 綾*

Arthur Clennam's Sense of Guilt in *Little Dorrit*

Aya YATSUGI

I

Charles Dickens (1812-70) の中後期の作品 *Little Dorrit* (1857) は、小説世界の中枢を司る「迂遠省」(“the Circumlocution Office”) がクリミア戦争後の行政機構の腐敗を表していると指摘されることを始め、執筆当時の英国社会を反映した社会小説的要素が強い作品だとしばしば指摘される¹⁾。確かに、登場人物は実在の銀行家 John Sadleir をモデルとする財界のトップ Mr Merdle から、負債者牢獄囚人 Mr Dorrit まで、社会階級の上から下まですべてを網羅していると言っていいほど多岐に渡り、ヴィクトリア朝社会を映す一大パノラマを成していると言える。ただし、Dickens は、ただ単に当時の社会を再現し、人物たちを散りばめたのではない。Alan Shelston が、“the institutions are important not in themselves but as metaphors for a repressive social psychology”²⁾ と指摘しているように、*Little Dorrit* を含む中期以降の作品において Dickens は、社会制度を人間精神を脅かすものの象徴と見做し、そのような制度が伝染病のように蔓延する社会における人間たちを描いている。*Little Dorrit* における伝染病的な社会悪の一つは、多くの人々を巻き込み破産させた Merdle 企業への投資熱である。*Little Dorrit* 以外の作品について言えば、*Bleak House* (1852-3) における裁判制度は、制度そのものというよりも、ほとんどすべての登場人物を巻き込み、彼らを心身共に衰弱させる社会的な病のメタファーだと考えられる。Shelston は、このような社会制

度と個人の関係について Dickens と William Blake の共通点を指摘して以下のように述べている。

both Blake and Dickens have at the heart of their work a sense of a threat to human spirit from the forces of repression, and they locate that threat symbolically in the rapidly developing urban and industrial world around them.³⁾

後に引用するが、Dickens は、上の引用の “the rapidly developing urban . . . world” に対する憂いを、この小説における圧迫された人間の代表格 Arthur Clennam の心情とロンドンの光景を二重映しにすることによって示している。Arthur Clennam は、小説世界の種々の社会問題を目のあたりにし、自分自身、Merdle への投資熱とその後の混乱に巻き込まれるなどすることによって社会への絶望感を深め、不安感に苛まれているように見えるが、ここでは、彼の不安感の根本が、家庭的な愛情が著しく欠如した彼の子供時代にあることに特に注目したい。

Arthur Clennam が四十代に達していながら子供時代に植え付けられた疎外感を未だに脱却できずにいるのと同様に、作者の Dickens も自らの過去にこだわり続け、そのこだわりを作品に反映させている。即ち、Dickens は、彼自身が子供時代に両親から十分な保護や教育が与えられなかったという被害者意識を持っていることから、守られるべき子供として扱われず疎外された子供たちに大きな関心を寄せ、子供を庇護し愛することを怠る大人たちへの反発や批判を作品中で繰り返し述べている。例えば、初期の代表作 *Oliver Twist* (1837) において

* 宇部工業高等専門学校英語教室。

Dickens は、本来弱者を保護すべき社会制度や文字通りの社会悪である犯罪者の非情さや残忍さを、幼く無力な救貧院の孤児 *Oliver Twist* に直面させることによって、グロテスクなまでに強調し、攻撃を加えている⁵⁾。なお、この作品は、1795年及び1834年の新旧貧民法 (the Poor Law) に反発する Dickens のプロパガンダ的意図を多分に含んだ作品だと考えられることが多いが⁶⁾、社会が弱者を圧迫し疎外しているという考えは、Dickens が少年時代に靴墨工場に通いながら実際に見たロンドンの貧困の様子から得られたものだと言える⁷⁾。また、彼は *The Old Curiosity Shop* (1840-41) において、大人に対する “confidence” と “simplicity” を子供の二大資質と見做し、これらの資質は子供には加重な精神的負担を背負わせることによって容易に破壊し得るのだと主張し、まだ幼気な孫 Little Nell を危険な夜の通りに使いに出す Trent 老人を非難している⁸⁾。使いに出されるだけでなく、祖父の母親的役割という精神的負担を強いられる Little Nell は、*Oliver Twist* が社会によって疎外されたように、肉親によって疎外された子供の一例だと考えることができる⁹⁾。

以上の *Oliver Twist* や Little Nell について強調されているのは、彼らを圧迫する悪の邪悪さと対照的な純真さや悪に怯える弱々しい姿であるが¹⁰⁾、Dickens の中期以降の作品に登場する子供については、Alex Zwerdling が指摘しているように、子供時代に植え付けられた精神的外傷の根強い影響の方に重点が置かれるようになる¹¹⁾。小説家の関心が、疎外された子供そのものから疎外による影響へと推移するに伴って、描かれる子供の年齢が上昇し、子供というよりも子供時代に植え付けられた疎外感を払拭できないでいる大人たちが多く登場するようになり、*Little Dorrit* に至っては、既に中年の Arthur Clennam が登場するのである。また、*Oliver Twist* が文字通りの孤児であるのに対して、Arthur Clennam のように、親の愛情を得られないために孤児同然に育ち、それ故の精神的な外傷を癒せないでいる人物たちを、精神的な孤児と呼ぶことができよう。

II

F.R. Leavis や Alan Shelston によって、William Blake の *Songs of Experience* における *London* が引き合いに出されているように¹²⁾、Arthur Clennam が二十年ぶりを見るロンドンには、張り巡らされた通りが刑罰の

道具である足踏み車 (treadmill) のように人々を疲弊させる逃げ場のない巨大な牢獄のような様相を呈し、息詰まるような教会の鐘の音は、彼らにこの世での贖罪を迫り来世への恐怖心を駆り立てる。

It was a Sunday evening in London, gloomy, close, and stale. Maddening church bells of all degrees of dissonances, sharp and flat, cracked and clear, fast and slow, made the brick-and-mortar echoes hideous. Melancholy streets, in a penitential garb of soot, steeped the souls of the people who were condemned to look at them out of windows, in dire despondency. In every thoroughfare, up almost every alley, and down almost every turning, some doleful bell was throbbing, jerking, tolling, as if the Plague were in the city and the dead-carts were going round. Everything was bolted and barred that could by possibility furnish relief to an overworked people. No pictures, no unfamiliar animals, no rare plants or flowers, no natural or artificial wonders of the ancient world — all *taboo* with that enlightened strictness, that the ugly South Sea gods in the British Museum might have supposed themselves at home again. Nothing to see but streets, streets, streets. Nothing to breathe but streets, streets, streets. (67-8.¹³⁾ イタリックは Dickens)

以上のロンドンの光景は、それを眺めている Arthur Clennam の心象風景でもある。彼は、二十年ぶりを見るロンドンの殺伐とした様子に、自分を苦しめている漠然とした罪の意識と、それを購わなければという強迫観念と共通する何か見出だし、ますます憂鬱になっているからである。このような Arthur Clennam の心理状態は、Steven Marcus の次の指摘を裏付けていると言えよう。

In *Little Dorrit*, indeed in all his later writing, the discovery of the connections between social and personal disorders becomes Dickens's chief pre-occupation.¹⁴⁾

贖罪を迫る鐘の音に屈したかのように、Arthur は最終的

に自らを文字通り投獄してしまうが、以上の殺伐としたロンドンの光景を眺めている段階で鐘の音が Arthur に思い出させているのは、子供の頃の苦痛そのものだった Mrs Clennam の教育である。

Mrs Clennam は、宗教的に過度に厳格な教育を通じて、Arthur に彼のその後の考え方や行動の基礎となる自分自身の存在に対する漠然とした不安感を与えている。彼女の教育は、Beth F. Herst が指摘しているように、*Bleak House* で Miss Barbary が Esther Summerson に対して行なった教育に非常によく似ている¹⁵⁾。この二人の「代母」¹⁶⁾たちは、それぞれ、夫、及び、妹の不義を許すことができず、その怒りを罪を犯した本人に対してではなく、罪の結果として誕生した子供たちに向け、Arthur Clennam と Esther Summerson の二人に後々まで続く疎外感を与えている。Dickens は、反駁することによって自らを守ることができない子供に、彼らには責任のない罪を押しつける二人の「代母」たちを、各々の宗教的な厳格さを強調することによって、男女の愛を理解せず、子供の誕生そのものに対して否定的なカルヴァン主義者として激しく非難していると考えられる。

さらに Mrs Clennam においては、使用人の Jeremiah Flintwinch に男性的だとからかわれるほどの商才を發揮させることによって、宗教的戒律の厳守に加えて、勤勉な金銭的利潤の追求における非人間的側面を提示していると言える。母親だけでなく父親も、家庭を顧みることなく商売に没頭していたことが子供時代の Arthur に疎外感を与えたことは、後に彼が自分自身のことを、“the only child of parents who weighed, measured, and priced everything”(59)と冷笑的に呼んでいることから容易に推測できよう。金銭的利潤の追求における利己主義とは、Dickens が、*A Christmas Carol* (1843) の Scrooge や、*Dombey and Son* (1844-6) の Mr Dombey の強欲や傲慢さにおいて人間を非人間的にならしめるものとして攻撃し、Alan Shelston が、無力な個人を圧迫する、実にヴィクトリア朝的な “a repressive social psychology” と呼んだものである¹⁷⁾。

Arthur Clennam は子供時代から、父親には母親に対する何らかの引け目があるのではないかと感じていたが、これは後に、父は誰かに対して罪を犯し、母に精神的に圧迫されているが故にその罪を償えないまま亡くなってしまったのではないかという疑念へと変化している。反目し合う両親の間で Arthur がいかに苦痛を受けていたかは次の描写によく表れている。

To sit speechless himself in the midst of rigid silence, glancing in dread from the one averted face to the other, had been the peaceullest occupation. (73)

以上のように自意識を低下させることで、彼は必死に心の平静を保とうとしていたわけだが、母の父に対する精神的優位を彼が感じ取ったのは、Clennam 商会経営上の手腕における母の父に対する優越の故ではないかと思われる。というのは、Sylvia Bank Manning が *Bleak House* について論じる際に、数人の社会的活動や商売に没頭し家庭を顧みない女性の人物たちを挙げ、男性的な役割を演じるために女性としての役割を捨てた女性たちと呼んでいるが¹⁸⁾、Mrs Clennam にも、彼女たちと同様に、ヴィクトリア朝の理想的女性像である「家庭の天使」の対局にある男性らしさを見出だすことができるからである。Manning が挙げる女性たちは、家庭外に各々の役割を見出だしているだけでなく、夫に精神的苦痛を与えるほどに攻撃的な性格を持っており、この点だけで「家庭の天使」と相反する存在だと言えよう。もちろん母親だけでなく父親からも愛されなかった Arthur は、Dickens が *The Old Curiosity Shop* で主張している、大人に対する “confidence” を養うことができず、よって、親に対して疑いを持つようになったとも言えるが、両親のうちでも母親に疎外されたことが彼に与えた影響は大きいように思われる。親の経済活動への没頭によって自分は疎外されたという被害者意識が、Arthur Clennam に、Clennam 商会が築いた財そのものへの疑いまで抱かせている。つまり、彼は、両親は他人を犠牲にして経済活動を行い、利潤を得ているのではないかと疑っていた。故に、屋敷で偶然見かけた Amy Dorrit の子供っぽく無邪気な外見とは裏腹の妙に人目を避けた行動や、Marshallsea 牢獄での惨めな生活に個人的な関心を持った時、彼は、両親は彼女が本来受けるべき恩恵を不当に奪ったのではないかと考え、彼女を現状から救うことで、母親も加担しているらしき父親の罪を補償せんとした行動に出たのである。

それにしても、なぜ Arthur は両親が犯したらしき罪を自分自身のもののように感じ、Amy を救う行動を通して補償せんと試みたのか。根本的に、彼には、父親の犯した罪を自分のものであるかのように背負わされたことから、自分の存在そのものに疑いを持ち、故に、自分の

言動に自信が持てず、謂れのない罪まで自分のものとして考えてしまう傾向がある。さらに、Clennam 商会の跡取りとしての立場をあまりにも強く意識させられていたために、Arthur は、父の事業やその結果築かれた財だけでなく、父の犯したらしき罪や、それ故の父の苦悩まで自分が受け継ぐような気持ちになっていたことを考慮すべきである。ここで思い出さなければならないのは、Mrs Clennam が、Arthur への厳格な教育について、“I devoted myself to reclaim the otherwise predestined and lost boy; to give him the reputation of an honest origin” (846) と後に告白していることである。彼女の告白に、自らの非人間的な行為を正当化しようとの意図を見いだすこともできるが、それでも Arthur が、嫡子ではないにしても、Clennam 商会の跡取り息子という社会的な立場に相応しい “the reputation of an honest origin” を身につけなければならなかったことは確かであろう。家庭的な愛情が欠如した Clennam 家は本来家庭が果たすべき役割を果たしていないにも関わらず、Arthur が、跡取り息子という家に対する義務だけは要求されたというのは皮肉なことである。彼と同様の状況が、*Dombey and Son* の Little Paul にも見られる。父親の Mr Dombey は息子の Paul を Dombey 家の跡取り息子以外の何者だとも見做さず、跡取りとしての独立心を早く身に付けさせるようにと、息子の乳母に、Paul を子供扱いしたり愛情を与えたりすることを禁じ、その結果、Paul は子供にしては妙に年寄りみだ面を身に付けてしまうのである¹⁹⁾。

Arthur Clennam が、自分自身の父の罪に対する加担を確信し、その罪を購わなければという強迫観念を持つようになったのは、父の苦悩を目のあたりにし、その死を見届けた中国での二十年間のことである。この二十年間は、成人した Arthur が恋人の Flora Casby との仲を引き裂かれ、Mrs Clennam の意志で中国での父の事業を手伝うことになり、言わば、外地で青春時代を浪費した期間である。彼が苦悩する父の姿を自分の将来像以外の何とも見ることができず、罪を購わなければという強迫観念まで持つに至ったことを考えると事実上の流罪であり、Arthur 自身、この二十年間を “exile” と呼んでいるのももっともである。父親が、妻に言いたいことを言えないままに、“D.N.F.” 即ち “Do Not Forget” と刻まれた時計だけを残して亡くなるや否や、Arthur はロンドンに戻り、父の遺品である時計を Mrs Clennam に突き付けて父の秘密を聞き出そうとするだけでなく、Clennam

商会から一切手を引く宣言をする。つまり彼は、跡取りとしての立場を放棄することによって、罪を背負い、贖う苦悩まで父の遺産として相続することを必死に避けようとしているのだ。また、彼が Amy Dorrit に初めて出会い、罪の意識を補償するための行動を開始するのもこの時である。その後、彼はエンジニアの Daniel Doyce と共同事業を始め、さらに、家賃の取り立て屋 Pancks の勧めで投資による利潤の追求を試みるようになる。このようにして Arthur は Clennam 商会から逃れ、自分自身の生活を始めようとするのだが、それが破綻した時、Arthur は再び罪の意識と、それを贖わなければという強迫観念に苛まれることになるのである。

III

Arthur Clennam は、Doyce との事業や Pancks の勧めによる Merdle 企業への投資を通じて、小説世界に蔓延する病にも似た社会問題に関わるようになる。既に見たように、子供時代の Arthur の苦悩の一つは家庭を顧みることなく商売に没頭する両親の利己主義にあり、彼は経済活動そのものに疑念を持っていたように思われるのだが、結局の所、両親が行ったのと同じ経済活動を、彼は生活の手段としたわけである。利潤の追求における利己主義はヴィクトリア朝における社会悪の根源でもあるわけだが、これは、*Little Dorrit* 第二部第十三章の “The Progress of an Epidemic” において、社会に蔓延する伝染病として扱われている。財界のトップ Mr Merdle の名声による投機熱に浮かされた人々が Merdle 企業にせっせと投資を行なうが、彼の自殺と、実際には彼は資産も何もない、財界のトップという名声以外の何も持たない人物であったという事実の暴露によって、各々が財産を失うだけでなく、大きな混乱を社会全体に引き起こすという事件である。

既に見たように、Arthur Clennam も Merdle に投資した一人であるが、彼は、利潤の追求のみを念頭に置いたこの盲目的な行動に対する自分の責任を非常に敏感に感じている。彼は、投資の失敗によって、留守中の共同経営者 Doyce を破産に追い込み、その責任を取るために、進んで Marshalsea 牢獄に投獄される。Arthur には、父が本意ながら、結果として Amy Dorrit を犠牲にしたように、自分も Doyce を窮地に追い込んでしまったという個人的な罪の意識もあっただろう。しかし、Arthur を含む多くの人々に、盲目的に Merdle を信用し投資す

るよう仕向け、その結果負債を作り、混乱の一要因とならしめるような社会の責任も問われるべきであろう。どんな個人的な背景があったとしても、また、負債者牢獄制度が存在している以上、負債を作ること自体が罪であるにしても、本来罪のない人々に罪を犯させ、さらに贖罪を迫るような雰囲気を作り、Dickens は伝染病と呼び、その雰囲気を作り出す社会制度を、前章の冒頭で言及した教会の鐘の音に象徴させている。同時に、Dickens は、社会中枢に君臨しておきながら現実には何の機能も果たさない迂遠省の基本理念を、皮肉を込めて “How not to do it” と呼ぶことによって社会の個人に対する無責任さを示している。

罪を贖うべく負債者牢獄囚人となった Arthur Clennam だが、責任を取っているというよりも、破産の後の現実的な後処理や世間の非難を獄中にあることで回避し、責任を取っているという奇妙な安心感に浸っているように見える。これには、“dreamer” と呼ばれ、夢想癖を持つ彼自身の現実逃避の傾向も影響しているように思われるが、負債者牢獄制度そのものの矛盾した特質についても考慮する必要がある。負債者牢獄制度とは、実際には、囚人たちから負債に対する現実的な責任、即ち、負債が返済を行なう手段を奪う制度であるからだ。そもそも獄中で金を稼ぐのは不可能である。責任を取るところか、囚人たちは借金取りから返済を迫られる恐怖を免除されており、投獄中の医者 Dr Haggage が “Peace” “Peace”(103) と繰り返し強調しているように、彼らは責任を免除されているが故の「壁の中の平和」を享受しているに過ぎない。

ところが、Dr Haggage らほとんどの囚人は気付いていないのだが、囚人たちは無意識のうち自分自身の人生によって、負債を返済するよう仕向けられている。彼らは人生における年月だけではなく、実社会で生きていく能力をも剥脱されており、Mr Dorrit に典型的に見られるように、壁の外で実際に生きていく術を獄中で失い、物理的に釈放されたとしても、精神的に釈放されるのは不可能に近いのだ。Mr Dorrit は、転がり込んできた遺産によって負債を返却し、釈放されると、Mr Merdle と肩を並べるほどの名声を手に入れる。しかし、彼が獄中以外のどこでも生きていけないことが、ローマの Merdle 邸での晩餐の場面で明らかになる。意識の中でだけ牢獄へと戻り、正常な意識を回復しないまま死んでいく Mr Dorrit は、囚人としての過去を断ち切ったかに見えても、精神的には終生、牢獄を離れることができなかつたので

ある。死を目の前にした父の顔に、娘の Amy は長すぎた投獄の影響、即ち “a deeper shadow of the shadow of the Marshalsea Wall”(712) を見いだし、父が心理的にはまだ獄中にあったことを痛感している²⁰⁾。

Mr Dorrit が、自らの人生によって負債を払い続けていたことに、Amy だけは釈放される以前から気付いていた。彼女は、Mr Dorrit に遺産が転がり込んだことを報せに来た Arthur Clennam に次のように負債者牢獄制の矛盾点を指摘している。

It seems to me hard . . . that he should have lost so many years and suffered so much, and at last pay all the debts as well. It seems to me hard that he should pay in life and money both. (472)

自らの人生と、金銭とによって二重に負債を払わなければならない父への哀れみと負債者牢獄制度の矛盾点への憤りを、Amy は感じざるを得ない。いつになく感情を表にして以上の指摘を行なった彼女に、Arthur は、彼女のように優しく純粋な人物でさえも、長い投獄生活の間に染みついた “the prison atmosphere” を見る。この段階で、投獄の精神的な悪影響を見出すことのできた彼は、制度としての負債者牢獄制度の矛盾におぼろげながら気付く。反発することのできる健全な目を持つことができているはずである。しかし、そのような矛盾に気付いていながら、彼は、罪の意識に耐えられなくなったのか、社会制度上、罪を贖う場として存在する負債者牢獄に身を置き、少なくとも、罪を償っているというポーズを取ることによって、自分を納得させようとしているように見える。同時に、Mrs Clennam に、父の遺品である時計を突き付けた時には持っていた真実を知ろうとする気持ちも失ったように見える。獄中にある彼は、Mrs Clennam が Clennam 家の秘密をすべて暴露する場面にも居合わせることができず、故に、自分が何のために子供時代に罪の意識を植え付けられ、また疎外されたのかを彼がその後理解したのかどうか不明のままである。この小説は、Arthur と Amy の結婚という一応のハッピーエンドで結ばれているが、牢獄以外に落ち着く場所のない彼らは、Shelston が、“in *Little Dorrit* Dickens seems to abandon the idea that the individual can assert himself any hope of success against the pressure of society”²¹⁾ と述べているように、既存の制度に身を任

せることしかできないように見えるのだ。

註, 及び補遺

- 1) John Holloway は, Dickens が *Little Dorrit* において政府を攻撃するプロパガンダ的意図を持っているわけではないことを強調した上で, 作中に描かれている, 当時実際にあった事件や社会問題, 特に, クリミア戦争を契機にした行政機関の腐敗について解説している. (“Introduction,” *Little Dorrit*, Charles Dickens [Harmondsworth, Middlesex, England : Penguin Books, 1969], 17-20.)
- 2) Alan Shelston, “Dickens,” *The Victorians*, Arthur Pollard ed. (Harmondsworth, Middlesex, England: Penguin Books, 1993), 94 参照.
- 3) Shelston, 95 参照.
- 4) Dickens の子供時代については, Peter Ackroyd による伝記 *Dickens* (New York : HarperPerennial, 1990) や, W. Somerset Maugham の “Charles Dickens and David Copperfield” (*Ten Novels and Their Authors* [London : Heinemann, 1954]) を参考にしてある. 例えば, Maugham は, 母親の学校経営失敗のため生じた借金返済のために大切にしていた本を得られたことや, 父親が Mershalsea 牢獄から釈放された後も引き続き靴墨工場で働かされたことが, 少年であった Dickens をひどく憤慨させたのだと指摘している. (125-7)
- 5) Kettle Arnold は, *Oliver Twist* をリアリスティックな子供と見做すことはできないが, 救貧院の孤児として象徴化されているが故に, 圧迫された子供の恐怖が十分に表現されていると延べている. (*An Introduction to the English Novel* [Hutchingson UP, 1951], 132.)
- 6) Angus Wilson, “Introduction,” *Oliver Twist* by Charles Dickens, (Harmondsworth, Middlesex, England : Penguin Books, 1966), 16-8 参照.
- 7) Ackroyd は, 貧しい屋根裏部屋に下宿しながら靴墨工場に通っていた Dickens の心境について, “For talented and ambitious child there is no hell worth than this” (59) と同情を寄せているが, この時ロンドンの貧困を実際に見た経験が, 彼の世の中の不正に対する感覚を磨き, 小説に生かされていると考えられる.
- 8) Dickens が, 語り手を通じて, 子供の “confidence” と “simplicity” について述べながら Trent 老人を非難しているのは以下の部分である.
It always grieves me . . . to contemplate the initiation of children into the ways of life, when they are scarcely more than infants. It checks their confidence and simplicity - two of the best qualities that Heaven gives them - and demands that they share our sorrows before they are capable of entering into our enjoyments. ([Harmondsworth, Middlesex, England : Penguin Books, 1972], 48.)
- 9) Trent 老人と Little Nell に見られるような, 守る側と守られる側の役割の逆転の中で, Dickens は「加重な精神的負担」を背負わされた子供を描くことが多い. Arthur A. Adrian は, Trent 老人と Little Nell の関係を, Dickens がこのような役割の逆転を描いた最初の例の一つと見做し, それに続く例として, *David Copperfield* の Agnes と Mr Wickfield, *Little Dorrit* の Amy と Mr Dorrit の親子関係について述べている. (*Dickens and the Parent-Child Relationship* [London : Ohio UP, 1984], chap.8.)
- 10) Angus Easson は, *Quilp* を中心にしたコントラスト, 即ち, “youth and old age, beauty and deformity, countryside and city, light and darkness, freedom and constraint, illusion and reality” に着目して *The Old Curiosity Shop* を論じている. (“Introduction,” *The Old Curiosity Shop* by Charles Dickens [Harmondsworth, Middlesex, England : Penguin Books, 1972], 18-9.)
- 11) Alex Zwerdling は, Dickens の子供についての関心は, *Dombey and Son* (1844-6) 執筆時までには, その肉体的苦痛から精神的苦痛へと推移し, 子供時代に受けた精神的外傷の後の人生への影響に重点が置かれるようになっていくと指摘している. (“Esther Summerson Rehabilitated,” *PMLA* [1973], 429.)
- 12) F. R. Leavis, “Dickens and Blake : *Little Dorrit*,” *Dickens the Novelist*, F. R. and Q. D. Leavis eds. (London : Chatto and Windus, 1970), 227-8. Shelston, 94-5. また, Ackroyd は, この場面を, “a perfect picture of urban melancholy” と呼び, Arthur Clennam の憂鬱的な傾向を示唆しているように思われる. (470)

- 13) Charles Dickens, *Little Dorrit* (Harmondsworth, Middlesex, England : Penguin Books, 1969.)
Little Dorrit からの引用はすべてこの版による。
- 14) Steven Marcus, *Dickens from Pickwick to Dombey* (New York : Norton, 1985), 47 参照。
- 15) Beth F. Herst, *The Dickens Hero : Selfhood and Alienation in the Dickens World* (London : Weidenfeld and Nicolson, 1990), 100 参照。
- 16) *Great Expectations* (1860-61) の Mrs Joe を始め, Dickens の作品における, 理想的な母親像からほど遠く, 自分自身は子供を持たない「代母」たちは, Dickens の描く親子関係を考察していく上で重要な鍵になりそうである。
- 17) Shelston, 94 参照。
- 18) Sylvia Bank Manning は, *Bleak House* について論じる際に, Mrs Jellyby, Mrs Paradiggle, Mrs Snagsby を, 男性的な役割を演じるために, 女性としての特質を放棄した女性たちという位置付けを行っている。(Dickens as Satirist [New Haven : Yale UP, 1971], 113-4.) また, Dickens が女性の役割を家庭内に限定し, 以上挙げたような女性を非難しているが故に, Dickens は, 例えば Barbara Gottfried によって, “one of the most influential writers to propagate/disseminate the Victorian ideal of woman’s special domestic mission” と呼ばれているのであろう。(“Fathers and Suitors : Narratives of Desire in *Bleak House*,” *Dickens Studies Annual* 19 [1990], 169.)
- 19) 第一章の有名な「ロンドンの霧の場面」で象徴的に示されるように裁判を中心にした *Bleak House* において, Esther Summerson は, 裁判に関係しない希有な人物である。Gottfried は, 「跡取り」としての役割を強要されることはないにしても, 社会との関わりを通して滅びることさえできず, 「父親代わり」の John Jarndyce の館である *Bleak House* に止まり, 理想的な主婦になるよう定められた彼女の, 女性としての不満や, 最後には裁判を通じて心身共に衰弱するものの父親的存在である Jarndyce に反抗することができる Richard Carstone への羨みを読み取ろうとしている。(180-81)
- 20) J. Hillis Miller は, *Little Dorrit* における “shadow” を, “Dickens’ key term linking physical imprisonment and imprisoned states of soul” と見做し, その象徴性に注目している。(Charles Dickens : *The World of his Novels* [Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 1959], 229.) この “shadow” は, Amy Dorrit が死を目前にした父の顔に見いだした “a deeper shadow than the shadow of the Marshalsea Wall” (712) によって典型的に示されている。
- 21) Shelston, 104 参照。

(平成7年9月25日受理)